

【旧約聖書日課】箴言 9章1～11節

- 1 知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた。
- 2 獣を屠り、酒を調合し、食卓を整え
- 3 はしためを町の高い所に遣わして  
呼びかけさせた。
- 4 「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」  
意志の弱い者にはこう言った。
- 5 「わたしのパンを食べ  
わたしが調合した酒を飲むがよい
- 6 浅はかさを捨て、命を得るために  
分別の道を進むために。」
- 7 不遜な者を諭しても侮られるだけだ。  
神に逆らう者を戒めても自分が傷を負うだけだ。
- 8 不遜な者を叱るな、彼はあなたを憎むであろう。  
知恵ある人を叱れ、彼はあなたを愛するであろう。
- 9 知恵ある人に与えれば、彼は知恵を増す。  
神に従う人に知恵を与えれば、彼は説得力を増す。
- 10 主を畏れることは知恵の初め  
聖なる方を知ることは分別の初め。
- 11 わたしによって、あなたの命の日々も  
その年月も増す。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 11章23～29節

<sup>23</sup>わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、<sup>24</sup>感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。<sup>25</sup>また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。<sup>26</sup>だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

<sup>27</sup>従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。<sup>28</sup>だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。<sup>29</sup>主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章41～59節

<sup>41</sup>ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことをつぶやき始め、<sup>42</sup>こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」<sup>43</sup>イエスは答えて言われた。「つぶやき

合うのはやめなさい。<sup>44</sup>わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。<sup>45</sup>預言者の書に、『彼らは皆、神によって教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。<sup>46</sup>父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。<sup>47</sup>はっきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。<sup>48</sup>わたしは命のパンである。<sup>49</sup>あなたたちの先祖は荒れ野でマナを食べたが、死んでしまった。<sup>50</sup>しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。<sup>51</sup>わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしと与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

<sup>52</sup>それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。<sup>53</sup>イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。<sup>54</sup>わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。<sup>55</sup>わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。<sup>56</sup>わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。<sup>57</sup>生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。<sup>58</sup>これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」<sup>59</sup>これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

### 「わたしは命のパン」【こども説教のために】

わたしたちが誰かから食事に招かれるのは、特別なことです。たとえ馳走でなくても、食事を用意してくれた人に感謝し、これからも関係を続けていく大切な存在だと考えるようになるでしょう。もしもそのようなことが繰り返しあるならば、わたしたちは、その人から、ただ食事をいただいているだけではなく、その人の大切な財産や時間、人生、生き方、何よりも愛を受け取っているのかもしれない。

主イエスが五千人の人たちにパンと魚を満腹するまで食べさせてくださったとき、食べさせてもらった人は皆、大喜びし、主イエスを「王」にしたいとさえ思いました(ヨハネ 6:5~15)。けれども、主イエスは、大勢の人々に食事を与えることでご自分が「王」になりたかったわけではないのです。主イエスは、パンを求めて追って来た人々を前にして、「わたしが命のパンである」(同 6:35)とおっしゃいました。パンをくださった主イエスが本当に与えようとなさったのは、ご自身だったのです。

「わたしは命のパン」とおっしゃり、「わたしを食べなさい」とおっしゃる主イエスの言葉を聞いた人々は、驚きました。主イエスの真意がわからなかったのでしょうか。けれども、わたしたちは驚きません。主イエスからパンをいただくわたしたちは、主イエスというお方のすべてをいただくのです。

## 食べさせることができるか？

コロナ前の一時期、教会の皆さんに「青年ランチ」と称して、青年たちの昼食のために食材を提供してくださるようお願いしていたことがありました。礼拝に来た青年たちは、その食材で自分たちの昼食を用意していたのです。これには、わたしなりの経験がありました。子どものときから育った母教会には、「ランチタイムサービス」というものがあつたのです。日曜日の礼拝後、わたしの知るかぎりずっと 150 円で、カレーやチキンライス、おでんなどのランチが提供されていました。中高生や青年たちは、これを目当てに教会に来る者も少なくなつたのです。教会で昼食を提供できれば、礼拝に来た青年たちが教会につながるきっかけにもなると考えたのです。最初のうちは、面白がつて自分たちで調理して作っていました。けれども、提供していただける食材にどうしても偏りがあるからか、いつも同じようなメニューになってしまっていました。少しバラエティを持たせてあげようとカップラーメンを置いていたこともありましたが、それも飽きてしまったのか、食べるのは大人ばかりになってしまいました。今どきの青年たちは、易々と食べ物に釣られたりはしないのかもしれませんが、それでも、わたしは彼らに食事してもらうことを諦めてはいません。教会が、人を食事に招くことから始まつたことを、知ってもらいたいからです。

主イエスは、五千人の人々を食事に招かれました。そのとき、主イエスの手元に用意できたのは、**パン五つと魚二匹 (6:9)** だけでした。それも、主イエスや弟子たちが持ってきていたわけではありません。一人の少年が持参していたものを提供してもらつたのです。しかし、そうまでして、主イエスは五千人の人々を食事に招かれたのです。彼らが貧しくて今日のパンを買うこともできなかつたから、というわけではありません。主イエスは、「**この人たちに食べさせる**」(6:5) ことをなさりたかつたのです。

主イエスを追い、探し求めてきたのは、その食事に釣られた人たちでした。食事に招くことで近づいてきた人々に対して、主イエスはお語りになられたのです、ご自身が本当に与えたいと願っているものが何か、ということ。

それは、「王」のような支配ではありませんでした。ただ毎日の食事を提供するシステムでもありませんでした。ご自身を与えたいと、主イエスは願われたのです、「わたしが命のパンです」と。

本当に与えたいと思われたご自身をお与えになるために、主イエスは、パンを提供されたのです。食事に招かれたのです。それが入口になることをご存じだつたからです。食事に招かれ、パンを食べた者が、自分を食事に招いた者が何者であるのかを知るとき、自分が本当は何を与えられたのかを知るとき、食事は、ただ空腹を満たす営みではなくなるのです。

## 天から降ってきたパン

わたしたちは、礼拝に招かれてくるとき、主イエスの食事に招かれていると教えられてきました。礼拝堂の中心、聖壇には、聖書、説教卓、洗礼盤と共に、聖餐卓が据えられています。「主の食卓」です。多くの教会が、この「食卓」を大きく、目につくものとしてきました。礼拝ごとに聖餐を祝うことをしない教会であっても、むしろそのようにしてきました。大きくすることができなくても、司式者は、そこで礼拝に来た者を招き、そこから送り出すのです。それは、礼拝にあずかる者が「主の食卓」にあずかる者であることを、はっきり示すためなのです。

けれども、この「主の食卓」で営まれる食事、聖餐のパンと杯に、だれかれ無制限にあずかっていたと、ということはしてきませんでした。教会は、礼拝堂に据えられた「主の食卓」からパンと杯を受けるのを、洗礼を受けている者に限ってきたのです。未受洗の方には、待ってもらってきたのです。

わたしは高校二年のクリスマスに洗礼を受けました。母教会では年に四回しか聖餐が祝われていませんでしたが、洗礼を受けるまで、聖餐の祝われる礼拝に出席するのは、どこか居心地が悪いと感じていました。排除されていると思ったことはありませんが、どこかに見えない境界線が引かれていたのです。自分では、まだ洗礼を受けていなくても信者のつもりでいましたから、かえって、聖餐に加えられなくても構わない、とさえ考えることもありました。そのようなわたしでしたが、洗礼を受けたクリスマス礼拝で初めて聖餐のパンを取って食べ、杯を取って飲んだとき、ホッとしたのです、「このパンと杯にあずかる食卓の交わりは、ずっと自分のために用意されていたのだ」と。これに加えられてよかったと、心から思いました。

主イエスが食事の交わりを通してお教えくださっていることを、多くの人は理解しませんでした。食事に招かれてパンを食べても、「**天から降って来た生きたパンである**」と言われる主イエスを受け取り、このお方と本当の意味で交わりを持つようになることにまであと一歩、踏み込むことができなかったのです。「この一線を踏み越える必要はない」と考えたのでしょうか。かつての洗礼を受ける前のわたしも、そう思っていたのです。

けれども、そのように考える者のためにも、「主の食卓」への招きは続けられているのです。食べていただきたいのです。すべての人に、食べていただきたいのです、**天から降って来た生きたパン**を。それは、主イエスのように「天からのパン」によって生きるようになるためです。「天からのパン」をお与えくださるお方、天の御父によって生きるようになるためです。天の御父に結びつく命の交わりに、主イエスを通して、すべての者が加えられるようになるために、すべての人を、主の食卓にお招きするのです。